

創刊のことば

よく知られたように liberal arts はなにものにも囚われない精神の自由のもとに展開する学問であり、それを修得することによりさまざまな現実課題に対応できる基礎素養・基礎教養を身につけることを理想としている。岩手県立大学の標榜する実学実践的研究教育が人間性を培う教養教育を基盤におく所以もそこにある。平成18年4月、全学に共通して提供する各種教育をより効果的組織的に検討実践する組織として岩手県立大学共通教育センター (Center for Liberal Arts Education and Research) を設置したことはこの理念をさらに推進するためのものである。ここに、センターに集い liberal arts を共に研究教育する教員による研究誌“Liberal Arts”を創刊できることは本センターはもとより本学にとって、大変慶ばしいことである。この発刊を機にさらにこの分野の研究の発展を期するものである。

本来心の世界の内奥は果てしなく、その展開は自由奔放横溢縦横無尽奇想天外である。心の宇宙はその可能性において、現実の宇宙の広さを遥かに超えるかもしれない。苛烈な専制君主でも心の世界の統制は本来不可能であった。しかし、ひとびとはいつも現実課題や暗黙の制約により心にさまざまなバリアを作ることとなる。科学的営為におけるこの制限の問題はさておき、一般的な意味での思考の貧困、想像力の欠如は、現代社会の諸問題の根底をなすものとさえ指摘される。家族と生産という現実の制約からもっとも距離のある時期の青年期・学生層はもっとも精神世界に向き合える時期でもある。しかしながら、その特有な心性はまさに亡霊のごとく登場する擬似宗教か心靈世界への耽溺に傾斜してしまうなど、その本来の豊穡の楽しみを知らないまま貴重な青少年期を過ごし、外的刺激を心の襞や精神の内奥に溜め咀嚼することなく衝動的に反応するか、無反応な未成熟性を引きずる。原因探しは意味はないが、今日の大人社会が豊かな精神文化を提供しなかったこと、またそれへの対峙を強く求めてこなかったことに一因があることは否めない。膨大で洪水のように変化する外部情報の中、立ち止まることなく受動的に生きざるをえない現代の青年学生に、古今東西の人々の生き様を語り、多様な異文化世界に心を馳せ、複雑な論理構成の楽しさを体験させ、より実際的には多くの書籍を渉猟させ (人々が精神の自由と個人的思考を手に入れたのは、印刷技術の開発と識字能力の普及により他者の言葉を単純に拝受することからの離脱によるともされる)、思考の遊び・想像の楽しみを存分に味あわせる——これこそ、変動する社会に旅たつ学生達に大学が与える重要な役割であろう。経験は時間空間の関数で増加するという意味では青年学生は貧弱である。その貧弱さに焦る若者は経験の背伸びを、大人たちもその経験不足を晒す。しかし心配することはない。心の世界の豊かさ深さ幅広さはいつでも誰もが創り上げることができる。こんなことに学生達が気づいてくれることが liberal arts を研究し、教えている人たちの共通な願いであろう。

“Liberal Arts” 創刊号に集められた論考の中にそうした思いを少しでも感じていただければ望外のことと思っている。

平成19年1月31日

岩手県立大学共通教育センター長
細江達郎